

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月9日現在

機関番号：32649

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530760

研究課題名（和文） ロールシャッハ・テスト人間表象反応の基礎データ作成

研究課題名（英文） Developing normative data of Rorschach human representation responses.

研究代表者

大貫 敬一（OHNUKI KEIICHI）

東京経済大学・経済学部・教授

研究者番号：40146527

研究成果の概要（和文）：ロールシャッハ・テスト（以下、ロ・テスト）における人間表象反応指標や対象関係の発達水準を評定する対象関係尺度を検討した結果、Urist (Urist, 1977; Urist & Shill, 1982) が考案した Mutuality of Autonomy Scale（以下、MOA）が、妥当性が確認された最も優れた対象関係尺度の1つであると考えられた。そこで、Holaday & Sparks (2001) のガイドラインをさらに改良した上で、日本人被検者を対象として用いることができるよう「MOA日本語版ガイドライン」を作成した。日本語版MOAガイドライン作成にあたっては、Holaday & Sparks (2001) の改訂ガイドラインに基づき、Urist (1977), Urist & Shill (1982), Kelly (1999), Coates & Tuber (1988) の定義や反応例を参考にし、次の3点の改良を行った。(1) Level 1 から Level 7 までの各水準の表題、定義、解説に関して、定義の不明確さや評定の困難さをもたらしている問題点をさらに改良した、(2) 単に日本語に翻訳するのではなく、対象関係論に精通していないテスターも理解し活用できる日本語版にした、(3) 日本人テスターに馴染み深い例示となるよう日本人被検者の反応例を用いた。

作成した「MOA日本語版ガイドライン」を用いて、非患者成人群のロールシャッハ反応について、対象関係の発達水準評価を行い、基準データを作成した（未発表資料）。

研究成果の概要（英文）：Studying various Rorschach indexes of human representation responses and object relation scales that measure the developmental level of object relationships, Mutuality of Autonomy Scale (MOA) developed by Urist (Urist, 1977; Urist & Shill, 1982) was thought most superior index or scale.

On the basis of the study by Holaday and Sparks (2001), resolving several problems with the MOA, such as the difficulty of the explanations and inconsistent evaluations, the Japanese guideline of Mutuality of Autonomy Scale (MOA) was developed.

In the Japanese guideline, (1) Definitions and explanations of each level and general rules are more precise, appropriate Japanese is used, and (2) Examples of the responses of Japanese participants that are familiar with Japanese testers are included.

Using Japanese guideline of Mutuality of Autonomy Scale (MOA), Rorschach responses of nonpatient adults were evaluated to 7 levels of developmental stages.

In the future, using this guideline, it will be able to develop effective method for using MOA that include the development of a clinical interpretation method using MOA.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000

年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学、臨床心理学

キーワード：心理検査、ロールシャッハ・テスト

1. 研究開始当初の背景

これまでの研究では、ロールシャッハ・テスト（以下、ロ・テスト）日本人成人基準データを作成し、Popular 反応（以下、P 反応）の研究を行った。P 反応の研究では、人間像 P 反応は、単独の人間ではなく「二人の現実的な人間の全身像」が最も多いことを示した（大貫・佐藤・沼，2005）。また、人間像 P 反応に運動が伴うことが多いこと、すなわち何らかの関係性を伴っていることも確認している（大貫ほか，2001）。これらの結果は、人間像 P 反応は、P 反応の公共性を示していると共に、健康なレベルの対象関係を示していることを示していると考えられた。

次に、沼・大貫・佐藤（2007）では、非患者成人の P 反応研究に基づき、統合失調症患者の P 反応の研究を行った。その結果、従来、特徴とされてきた P 反応の減少が見られず、Ⅱ、Ⅲ、Ⅶには、むしろ非患者成人と共通する人間像が知覚されており、多くの反応に M 反応が伴っている点も非患者成人と同様であることがわかった。しかし、カードⅡ、Ⅲ、Ⅶの全人間像反応を分析すると作話を中心とする逸脱言語表現が見られ、その部分に思考や知覚の障害が現れていた。また、P 反応の基準に達しない（P）反応に特徴が現れたり、むしろ、人間を知覚しにくい形態や刺激特性を備えた他の図版や領域でファンタジーの人間像が知覚されたり、病理を反映する投影がなされていることがわかった。

以上のことから、全図版を通した人間表象

反応全体の分析を行う必要があると考え、人間表象反応の指標や尺度の検討を始めた。

2. 研究の目的

(1) 「非患者成人群」のロ・テスト反応について、人間表象反応指標や対象関係発達評価尺度について、日本人非患者成人の人間表象反応基礎データを作成する。

(2) 次に、「臨床群Ⅰ」の統合失調症群の被検者のロ・テスト反応について人間表象反応データを作成し、非患者成人の基礎データとの比較から、臨床群の対象関係の特徴を示す特徴について検討する。

(3) 同様な方法で、「臨床群Ⅱ」の広汎性発達障害児・青年について人間表象反応データを作成し、非患者成人の基礎データとの比較から、臨床群の対象関係の特徴を示す特徴について検討する。

3. 研究の方法

(1) 非患者成人群の基準データの改訂

ロールシャッハ研究は日本人の標準的なロールシャッハ反応データに基づいていることが必要である。これまでの一連の研究では、基準データは N=300 名の成人基準データを用いていたが、データ収集を継続し、ロールシャッハ・テストデータプールからサンプリングをおこなって基準データの完成度を高める。

(2) 人間表象反応指標の検討

「非患者成人群」、「統合失調症群」、「気分障害群」から得られたロ・テスト反応について、これまでに妥当性があると考えられている以下の人間表象反応の指標・尺度について検討する。

① H%

人間の全身像反応の全反応に対する割合

② H : (H)+Hd+(Hd)

人間の全身像反応とそれ以外の人間反応の割合

③ GHR と PHR

良好な人間表象反応と良好でない人間表象反応の割合

④ MOA (自律的相互性尺度)をはじめとする対象関係評価尺度

⑤ その他妥当性があると考えられる指標・尺度等

4. 研究成果

(1) 非患者成人の基準データ改訂

これまで N=300 名の成人基準データを一連の研究で用いてきたが、データ収集を継続し、ロールシャッハ・テストデータプールからサンプリングをおこなって、N=340 名からなる成人基準データを作成し、基準データとしての完成度を高めた。

(2) 「MOA 日本語版ガイドライン」の作成

ロ・テストにおける、さまざまな人間表象反応指標や対象関係尺度を検討した結果、Urist (Urist, 1977; Urist & Shill, 1982) が考案した Mutuality of Autonomy Scale (以下、MOA) が、妥当性が確認された最も優れた対象関係尺度の 1 つであると考えられた。MOA は、Urist (1977) が対象関係の発達水準を評価する尺度として、7 段階から

なる尺度を考案したものである。

そこで、MOA 尺度を日本に導入し、日本人被検者を対象として用いるために、Holady & Sparks (2001) の「改訂ガイドライン」に基づき、「MOA 日本語版ガイドライン」の作成に着手した。「MOA 日本語版ガイドライン」を作成するためには、いくつかの問題点を解決する必要があった。

MOA は Kelly (1999), Coates & Tuber (1988) らによって臨床的に用いられてきたが、Holady & Sparks (2001) が、MOA の評定に関して、対象関係論に基づく各水準の解説や定義の難しさ、評価の信頼性の低さなどを指摘し、対象関係論に精通していないテスターにも評定可能となるよう「改訂ガイドライン」を作成した。

そこで、MOA 日本語版ガイドラインを以下のステップで作成した。

① Urist (1977), Kelly (1999), Holady & Sparks (2001), Coates & Tuber (1988) などに基づき、できるだけ平易な日本語となるよう各水準の記述を検討した。

② 予備的に作成したガイドラインを用いて、非患者成人群、統合失調症を中心とした臨床群、気分障害群のロールシャッハ反応の評定を行い、ガイドラインの不明確な点と評定困難な反応について検討・合議の上、ガイドラインを改訂した。

③ 各水準における定義の解説に、Kelly (1999) が挙げている反応例を提示すると共に、各群の日本人被検者のロールシャッハ反応を反応例として加えた。以上の手続きで、Holady ら (2001) と同様、対象関係論に精通

していないテスターでも評定できるような
「MOA日本語版ガイドライン」を作成した。

(3) MOA成人基準データの作成

作成した「MOA 日本語版ガイドライン」
を用いて、N=340名の成人基準データのロ・
テストについて評定し、各水準の出現率を求
めて、MOAによる対象関係発達水準を示す
基礎データとした、その結果、Level 3の出
現率の低さ、Level 1とLevel 2の識別の困
難さなど、MOAに関するいくつかの特徴や
問題点も明らかになった（未発表）。

本研究では着手できなかったが、今後は、
非患者成人群、統合失調症、気分障害群、広
汎性発達障害児・青年のロ・テスト反応につ
いて、作成した「MOA日本語版ガイドライン」
を用いて評定し、各群間での対象関係の発達
水準の比較や各群の特徴の把握を行うと共
に、個々の被検者のロールシャッハ・テスト
による臨床解釈に役立つものに発展させて
いくことが可能と考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線）

〔学会発表〕（計1件）

大貫敬一・沼 初枝・佐藤至子 2011年 ロ
ールシャッハ・テストMOA（相互自律性）
尺度の検討 日本心理臨床学会第30回大会
名古屋国際会議場

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大貫 敬一 (OHNUKI KEIICHI)

研究者番号：40146527

(3) 連携研究者

沼 初恵 (NUMA HATUE)

研究者番号：70409564

佐藤 至子 (SATOH YOSHIKO)

研究者番号：10511412